

私立大学研究ブランディング事業 成果報告書

学校法人番号	041002	学校法人名	東北学院		
大学名	東北学院大学				
事業名	東北における神学・人文学の研究拠点の整備事業				
申請タイプ	タイプA	支援期間	4年	収容定員	10,074人
参画組織	ヨーロッパ文化総合研究所、キリスト教文化研究所、東北学院史資料センター、東北文化研究所				
事業概要	<p>震災という未曾有の物質文化の破壊を経験した東北において、本学内にあるキリスト教中世的文化財を軸に、時代と地域による人間中心の人文学(人間学)研究に併せて、中世にさかのぼる神中心の神学に基礎を置く総合的な神学と人文学の研究拠点を確立する。受肉を根拠に物質文化を肯定する神学を土台として、キリスト教によって地域を人的知的に支える大学という本学が目指している大学像を可視化し、更に強固なものとする。</p>				
事業目的	<p>本学に関連する文化財を神学・人文学の見地から研究することによって、キリスト教物質文化の基礎が神学にあることを確認し、「東北における神学・人文学の研究拠点」を整備構築することが、本事業の目的である。この目的は、次の3つの観点に基づいている。</p> <p>第一点目は、東北学院の文化財に関連する。すなわち東北学院の「デフォレスト館」が国の重要文化財に。「ラーハウザー記念礼拝堂」等が登録有形文化財に近年相次いで指定され、それらの文化財のうちラーハウザー記念礼拝堂に設置された「キリストの昇天」を描くステンドグラスが、わが国に現存する唯一のヴィクトリア朝の重要工房ヒートン・パトラー&バインの作であることが判明した。それは近代イギリスにおける中世キリスト教の復興の現れであり、近代の基礎にある中世と神学の重要性、神学と人間学の関係、またヨーロッパにおける帝國的な普遍性と地域性の関係を再考する良いきっかけとなる。ラーハウザー記念礼拝堂自体も、中世復興のゴシック・リヴァイヴァルのチューダー様式であり、他方でラーハウザー嬢の基金をもとに秋保の石材を使って東北仙台の地域性のなかで建立されたことは、キリスト教が東北の地域性のなかの異物であるにもかかわらず、地域性に根ざしていることを如実に示している。本学の文化財の研究は、人文学の基礎に神学があることを再確認するきっかけとなるのであり、これらの文化財の学術研究を行うとともに、その文化的価値と意味を発信することは、仙台の文化的発展に貢献する上で重要である。礼拝堂と礼拝が市民に公開され、市民がそこでキリスト教中世に接することによって、近代と近代の物質文化の根拠についての考察を促される。</p> <p>第二点目は、本学が深く関わる東北の社会的課題に関連する。震災後の東北では、例えば人口減少や高齢化が深刻化し、東北の明るい未来図は描きがたく思われている。しかしイザベラ・バードに観察、そしてクリストファー・ノス(Tohoku: the Scotland of Japan, 1918)、また柳田国男(『遠野物語』1910年)が指摘する東北のプレ・モダンな地域性は、キリスト教の観点からは、原初的感受性を残したポスト・モダンな文化遺産として観光資源となる。そのような中で、本学はすでに2015年に改革の中長期計画として策定した「TG Grand Vision 150」で提唱したように、地域と連携した社会の課題やニーズに対応できる人材の育成を長期目標に据えている。こうした人材は実践的な知識やスキルと並んで、他者との協調と寛容や、知的創造性を身につけねばならないが、その涵養は神学に裏づけられた人文主義の精神によって可能となる。</p> <p>第三点目は、本学が進める大学改革である。創立以来130年間キリスト教精神に基づく人格教育を進め地域の発展に貢献してきた本学は、「TG Grand Vision 150」によってビジョン、新ブランド像、教育・研究・社会貢献の在り方などを定め、現在は計画の実行段階に移行している。大学教育の改革においては、神学が中世以来のあらゆる科学分野の出発点をなしているという日本の近代教育では看過されてきたことを踏まえて、神学にもとづいた科学的手法による世界理解を大学教育において一層深めることを目指す。そのことを具体的にカリキュラムの中で示して形にすることで、ブランディング事業の要にする。</p> <p>以上の3点から、本研究は本学の文化財の調査研究をきっかけに、神学を人文学の基礎として位置付け、物質文化を再考するとともに、東北の地域性を、ポスト・モダンな価値をもつ文化資源と考える。すなわち神学と人文学の総合的観点から物質文化を支える拠点を本学に整備し、キリスト教が成立したヨーロッパ中世の復興である礼拝堂とステンドグラスを公開することで中世キリスト教において成立した物質文化の根拠を確認する。それは同時に東北仙台の地域性を文化資源として開発することに寄与する。</p>				

私立大学研究ブランディング事業 成果報告書

学校法人番号	041002	学校法人名	東北学院
大学名	東北学院大学		
事業名	東北における神学・人文学の研究拠点の整備事業		
<p>東北における神学・人文学の研究拠点の整備を研究課題として、本事業をこの4年間進めてきた。実施に当たっては東北学院大学研究ブランディング事業計画委員会及び同研究推進調整委員会を立ち上げ、全学的な事業として研究を進める体制を整えることができた。神学研究推進部門、人文学研究推進部門及び地域研究推進部門の3部門を事業の柱とし、それぞれ「キリスト教の物質文化」、「地域主義と帝国理念」、「東北の地域性とキリスト教」を部門毎の研究テーマとした。加えて、3部門全てに関わる活動を実施するための共通領域を設定し、事業の推進を行った。</p> <p>【共通領域】 共通領域は、礼拝堂に設置されているロンドンのヒートン・バトラー・& バイン工房(以下HBB工房)製作のステンドグラス「昇天」の修復による技法的研究を含む総合的研究であり、近代におけるイギリスのゴシック復興におけるHBB工房の位置を定め、人間主義の近代における超越的中世の意味を探り、押川方義とともに建学の中心人物であった宣教師ホーイとシュネーダーのキリスト教思想を、その出身学校であるアメリカのランカスター神学校の神学とともに明らかにすることである。</p> <p>具体的な事業としては、時間と震災によってたわみ始めていたステンドグラスの修復と、修復によって明らかになったHBB工房のステンドグラスの様式研究で、様式研究はイギリスにおけるHBB工房の実作品調査、及び近年イギリスでもようやく始まった19世紀ステンドグラスの研究を踏まえてのHBB工房の位置付けである。アメリカにおける超越主義のキリスト教と密接な関係を持つアメリカの中世主義に関しては、アメリカにおけるステンドグラス復興とジャポニズムの最も重要な画家で、アメリカにおいても評価が充分でないジョン・ラファージに研究を定めた。また本学のキリスト教の出自であるランカスター神学校との交流、そして建学の精神の市民への可視化として月一度の公開礼拝である「水曜礼拝」を実施し、それと同時に本事業の機関紙として「水曜通信」を月に一度発行して定期的な諸事業の進捗報告を学内外に行った。</p> <p>ステンドグラスの修復は、2017年夏から2018年春にかけて行われ、その間、修復作業の市民への公開を2度、また完成記念礼拝と講演会を行い修復過程を記した報告書と動画をWeb上で公開した。ステンドグラス研究は、ラファージ研究に受け継がれ、年度毎に一回、計4回実施した。それはアメリカのキリスト教の研究ともなり、2020年度に19世紀のランカスター神学校を中心とするマーサースバーグ神学論争についてのシンポジウムを開催する計画につながっている。イギリスにおけるHBB工房の作品の現地調査は2016年と2018年度の2度実施され、15の作品の調査が終わった。アメリカのボストンには、ラファージのステンドグラスと並んで、HBB工房のステンドグラスが設置されており、HBB工房のゴシック的線描の保守性がラファージの劇的絵画的効果と比較して際立っていることも判明した。現地調査において収集したHBB工房作のステンドグラス「昇天」図像についての現段階での報告以上の様式論については、現地での研究も緒に付いたばかりであり、HBB工房の膨大な作品についての最終的判断は更なる調査を待つ。ラファージ研究については3回のシンポジウムを行った。いずれもボストンのラファージ、ピゲロー、ローエルの一族の人々の協力も得て、明治初期の日本と密接なつながりのあったボストンの超越主義キリスト教と仏教との関係にも展開することができている。それはいずれ日本におけるキリスト教の土着と超越のあり方に関わってくる。</p> <p>【神学研究推進部門】 2017年度以降、本格的に始動した神学研究推進部門では、本事業の目的の第三点「大学教育の改革において、神学が中世以来のあらゆる科学分野の出発点をなしているという日本の近代教育では看過されてきたことを踏まえて、神学にもとづいた科学的手法による世界理解を大学教育において一層深めることを目指す」を実現するため、研究計画を立案した。東北学院大学の建学の精神は、「宗教改革の「福音主義キリスト教」の信仰に基づく「個人の尊厳の重視と人格の完成」の教育」にある。それゆえ、「福音主義」とは何か、「福音」とは何かを探求することから始め、その後、その延長として「苦難と救済」をテーマに据え、研究活動を深めていった。2017年にはハイデルベルク大学教授であるベーター・ランベ氏、広島大学教授の辻学氏を招聘し、シンポジウムを開催し、続いて翌年にはアウクスブルク大学教授のベトラ・フォン・ゲミュンデン氏、及び西南学院大学名誉教授の青野太潮氏をお呼びし、シンポジウムを開催できた。2019年には本学とゆかりの深いランカスター神学校からランダル・C・ザッカマン氏、神戸改革派教会神学校校長である吉田隆氏を招き、シンポジウムを開いた。このように例年、海外からの研究者含む各分野の第一線で活躍する研究者と共に広く研究成果を公にすることができた。これ以外にも、本部門では文学部総合人文学科、及びキリスト教文化研究所と連携し、複数の催事を定期的に開催した。かつ先のシンポジウムでの発表を中心にまとめた研究成果物とし</p>			

事業成果

て二冊の書物、2018年に佐藤司郎・吉田新編「福音と何か 聖書の福音から福音主義へ」教文館、2020年に野村信・吉田新編「苦難と救済」教文館を出版できたことは大きな成果である。とりわけ、この研究プロジェクトを通して、米国のランカスター神学校とドイツのアウクスブルク大学との間で国際交流協定が締結され、学術的交わりを深める基盤を形成することができたことは大きな収穫といえるだろう。

【人文学研究推進部門】

本部門に期待された成果は、ヨーロッパ・キリスト教的な文化と東北固有の地域が織りなしてきた歴史的な関係を明らかにするべく、普遍的な帝国と地域が各時代の反発と融合の中でいかなる秩序を生み出してきたのかを明らかにし、東北の地域性を世界史的な視野の中で把握できるようにするための参照軸を提供することであった。これを通じて、本学の歴史的意義および東北の人文学研究の拠点としてのプレゼンスを高めることを最終的な狙いとした。本部門のテーマ「帝国と地域主義」を踏まえて、ヨーロッパ・キリスト教文化の世界的拡大・浸透の歴史的な流れおよびその影響を研究対象として設定した。また、本部門の活動を進めるために、本学オープンリサーチセンター(2007-11年度採用)のグローバリゼーション研究の成果を活かすべく、当センターを継承したヨーロッパ文化総合研究所と連携した。

本部門の事業は、海外調査活動を行った上で、その成果を公開講演会で公表し、研究内容について部門研究会で相互に確認し調整しつつ、最終的に成果を論文として取りまとめる方法で実施されている。本部門が関与したこれらの実施状況を総合すると、海外調査活動は4回(各1名)、公開講演会は10回(来場者数667人)、部門研究会は4回、若手研究者育成のための若手研究会3回(発表者14名)である。

研究活動の内容については、サブ部門「グローバル」領域において、ヨーロッパ・キリスト教文化圏の帝國的普遍的秩序がアジア、アフリカ、アメリカに及ぼした影響を対象として活動を進めた。構成員と研究課題は次の通りである。渡辺昭一(東北学院大学教授)「冷戦下の国際秩序の再編と帝国の解体」、佐藤滋(東北学院大学准教授)「1950・60年代におけるベヴェリッジ・プラン再編をめぐる党間構想」、原田桃子(米子工業高等専門学校講師)「イギリスの移民政策に対する新コモンウェルス諸国の反応と影響」、池田亮(東北大学准教授)「フランス第四共和政の崩壊と西側同盟」。それぞれ2017年度以降、研究成果を口頭、論文や著書で公表してきた。本学主催のものとしては、佐藤滋と原田桃子が2019年度に本事業の海外調査の成果を公開講演会で報告し、またインドキリスト教文化に関して2018年度に山下博司(東北大学教授)を講演者とする公開講演会を実施した。もう一つのサブ部門「ヨーロッパ」領域では、ヨーロッパ・キリスト教文化圏内における帝國的普遍的秩序の影響を対象として活動を進めた。その構成員と研究課題は次の通りである。杵淵文夫(東北学院大学准教授)「20世紀初頭ドイツにおける中欧構想の形成」、北村厚(神戸学院大学准教授)「ヴァイマルからナチズムへの「中欧」の継承と変容」、石川真作(東北学院大学教授)「ヨーロッパのイスラーム教徒移民を通してみた宗教間相互作用の研究」。やはり2017年度以降に研究成果を発表してきたが、そのうち本学主催のものとしては、杵淵文夫と北村厚が2018年度にヨーロッパ文化総合研究所の公開講演会(本事業協賛)で報告した。これらの研究の結果、西欧諸国の帝國的秩序と各地域固有の秩序や文化との間においては反発や対立も生じるものの、一方的ではなく相互的に社会的文化的な関係が強まることが明らかになりつつある。

【地域研究推進部門】

2017年度より本格的に始動した地域研究推進部門においては、130年以上の歴史を誇る東北学院の歴史的意義を、広く地域に公開することで、大学のブランド力を高め、あわせて地域自体の価値を高める活動を行ってきた。以下、具体的にその活動を紹介していきたい。

2017年度は、その活動を「東北学院の歴史」の編纂・出版活動に注力した。編纂会議を毎週行い、執筆・編集・校正を完了し、2017年10月に「東北学院の歴史」を河北新報出版センターから出版した。同書籍は、丸善書店や蔦屋書店をはじめとして、仙台・宮城県内の書店で販売され、東北学院大学のブランド力の強化に大きく寄与した。また、東北学院大学卒業生でもあり、クリスチャンでもあった鈴木義男の研究を進め、2017年9月30日には、「平和憲法と鈴木義男」と題して、古関彰一(和光学園理事長)、油井大三郎(一橋大学名誉教授)らを招聘し、仁昌寺正一(東北学院大学経済学部教授)によるシンポジウムを開催し、150名の来訪者を得た。

2018年度においては、米国国立公文書館に保存されているGHQ文書を中心とした東北学院関係資料の調査を行い、その成果をシンポジウム「戦後平和主義と鈴木義男」において地域に還元することが出来た。同シンポジウムでは、塩田純(NHK文化・福祉番組部エグゼクティブ・プロデューサー)、岡田一郎(日本大学非常勤講師)を招きそれぞれ平和憲法と鈴木との関係、日本社会党における鈴木の評価について、そして松谷基和(東北学院大学教養学部准教授)からもGHQ文書における東北学院と鈴木義男関係文書の報告を含めることが出来た。来場者は130名にのぼり、盛況であった。またブランディング事業として、史資料センター所蔵の1926年(創立40年)ごろに撮影された映像フィルム9巻のうち4巻を、一部修復した上で4K化することができた。同フィルムは、宮城県・あるいは東北最古の現存フィルムの可能性もあり、当時の仙台の様子を伝える動画として非常に貴重である。

2019年度、ブランディング事業の一環として地域研究推進部門が進めたのは、前年度に引き続き、東北学院所蔵の映像フィルムの4K化と、ラーハウザー記念東北学院礼拝堂の調査である。映像フィルム9巻のうち残り5巻を、一部修復した上で4K化し、9巻全ての4K化が完了した。4K化したフィルムについては、今後、字幕やナレーション等を付け、映像化を実施する予定であ

る。ラーハウザー記念東北学院礼拝堂の調査では、建築史学・建築材料学・建築構造学の立場から、礼拝堂を中心とするキャンパス空間の調査研究を進めてきた。礼拝堂の外壁に使われている秋保石の劣化状況の調査のために、秋田県立大学より石山智准教授と大塚亜希子助教、及び4名の学生が来校し、9月23日から25日の3日間、精力的な調査が行われた。また、長らくオリジナルのものかどうか分からなかった正門について、学内に残された図面を精査する中で、正門のデザイン案とみられる図面を複数発見したのを受けて、本学工学部環境建設工学科の学生14名が実測調査を行い図面と現状の比較調査を実施した。これらの調査に加え、東北学院史資料センター所蔵の図面や当時の院長であるD・B・シュネーターと設計者であるJ・H・モーガンとのやり取りの手紙を含む書簡及び写真のデジタル化を行った。特に本学に残る図面には、複数の指示やスケッチ等が上書きされており、その内容は、礼拝堂の建設過程を知る上で極めて貴重なものであるが、経年劣化が進み、デジタル化を行うことが急務となっていた。これらの研究成果については、「ラーハウザー記念東北学院礼拝堂建造物調査報告書」としてまとめ、公開している。

また当事業に関連して、2019年度公開シンポジウム「重要文化財『デフォレスト館』の価値について」(2019年9月28日(土)14時～17時)を開催した。同シンポジウムには東北大学大学院工学研究科の野村俊一准教授に加え、足立裕司(神戸大学名誉教授)、是澤紀子(日本女子大学家政学部准教授)、後藤治(工学院大学理事長)、関口重樹(宮城県教育庁文化財化技術主幹)といった方々を講師に招き、デフォレスト館の価値について、広域的な研究を進め、大学のブランディングに寄与できた。

本事業で得られた数多くの研究成果は、「東北学院大学研究ブランディング事業報告書」としてまとめ、大学ウェブサイトで公開した。また、研究活動等については今後継続して取り組み、TG Grand Vision 150(東北学院中長期計画)の推進に活かしていく。

なお、これまで本事業で実施していた水曜礼拝の実施と水曜通信の発行については、2020年度に新たに設置された宗教センターに引き継がれた。

【共通領域】

本学の建学に関わる資料及びドイツ改革派の東北伝道に関わる資料等の更なる充実を図るため、ランカスター神学校の調査を継続して実施していく。またランカスター神学校との協定にもとづく交流を引き続き行うとともに、ランカスター神学校をめぐってのマーサーズ神学論争の研究、HBB工房のスタンドグラス研究から中世主義研究としてのラファージュ研究などについても継続して研究をしていく。

【神学研究推進部門】

研究基盤整備を通して培われた成果を生かし、学外の研究者との連携を一層強め、建学の精神のさらなる理解を深めていきたい。神学研究推進部門における研究は、具体的には文学部総合人文学科の教員を中心として構成されるキリスト教文化研究所において継続していききたい。福音主義キリスト教の歴史的研究とその意義に関する研究を進めつつ、新たな研究テーマを設定する。来年は東日本大震災発生から10年になり、かつ総合人文学科設置からも10年になる。具体的には災害と神学に関するシンポジウムを計画し、それを成果物としてまとめ国内外に発信していきたい。

【人文学研究推進部門】

本部門は東北学院大学の研究ブランディングに資するべく、2019年度までの成果の取りまとめを到達目標に定めて、2020年度以降も活動を継続する。新型コロナウイルス流行の影響で活動に支障が出つつあるものの、2020年度は具体的には海外調査1回、公開講演会1回、部門研究会1回を予定している。2021年度に本部門の最終的な研究成果を総括し、査読誌の特集論文として公表する予定である。また、ヨーロッパ文化総合研究所との連携は今後も継続するとともに、本事業の研究成果はヨーロッパ文化総合研究所の今後の研究活動にも還元していく見込みである。

【地域研究推進部門】

本部門では、今回のブランディング事業の成果を生かして、今後は創立40周年記念フィルムのVTR化を進めていく。当該フィルムは無音フィルムであり、歴史資料として活用していくためにも、調査を進めた上で、登場人物や時代背景などの字幕を入れていく必要がある。また本資料を今後さらなる大学のブランド力の強化に活かしていく際には、原資料以外にも、ストーリー性を加味したVTR版が必要となるので、それも併せて検討していきたい。それ以外にも、ランカスター神学校所蔵の「創立50周年記念フィルム」の存在が確認されているので、所蔵調査を進めた上で、全巻の4Kデジタル化を図っていききたい。なお、これらの事業は、すべて現在計画中の、東北学院150年史編纂事業へと継承される予定である。

今後の事業成果の
活用・展開